

MRI 検査実施データから見る閉所恐怖症の実態について

北福島医療センター 放射線技術科 ○八巻 智也(Yamaki Tomoya)

丹治 一 宗川 高広 芳賀 章子 明珍 雅也 鈴木 亮祐 齋藤 久美

【目的】

MRI検査を日常施行するなかで閉所恐怖症や閉所が苦手の方にしばしば遭遇する。その不安の程度も多様であり、一律に対応することはできない。今回、過去の検査実施データから閉所恐怖症に関するデータの統計を行い、その実態について検討した。

【方法】

過去5年間にMRI検査を実施したデータの間診事項から、閉所恐怖・閉所不安に関連する事項を抽出した。その抽出データから、問診時に閉所恐怖・閉所不安と回答した方の年齢、性別、撮像部位の割合を求め、その回答群による検査の遂行率を求めた。なお、遂行率は下記の基準で算出した。

- 1.検査が問題なくできた。
- 2.配慮によって検査可能。(配慮により検査可能の数は、実施データの備考欄の記載内容(時間短縮にて検査した等)より参照しカウントした。)
- 3.検査途中で中止。

対象はMRI検査が実施された方であり、最初から検査中止になった方は対象外である。またデータの取り扱いには当院の倫理規約に基づき実施した。

【対象・使用装置】

対象データは当院でMRI検査を施行された2011年1月から2017年5月までの41323件である。データ管理及びデータ抽出にはファイルメーカーproを使用した。対象期間中のMR装置はPhilips社製 3.0Tと1.5Tの装置を使用した。開口部径、奥行の長さともに60cmである。

【結果】

対象期間中、検査全体の件数は41347件、閉所恐怖症、または閉所不安と回答した群は178件(0.43%)であった。男女比は4:6で女性の割合が多かった(Table 1)。年代別では30代、40代の割合が多い傾向であった(Fig.1)。部位別の割合では脊椎系、乳房が他の部位よりやや多い結果となった(Fig.2)。

閉所恐怖症、または閉所不安と回答した178人の中のうち、13人(7.3%)が検査途中で中止となったが、75%が問題なく検査を遂行することができ、18.5%が配慮により検査実施できた(Fig.3)。中止した群による年齢性別の偏りはなかった(Fig.4)。中止した群の検査別の割合は脊椎系の検査がやや多い傾向であった(Fig.5)。

Table 1 検査施行した中で閉所不安と回答した件数と割合

	問診時に閉所不安と回答	対象期間中の検査件数	検査全体との割合
男性	67	19599	0.342%
女性	111	21748	0.510%
全体	178	41347	0.431%

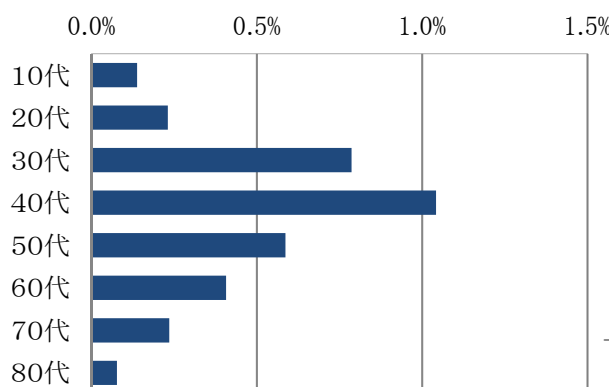


Fig.1 年代別割合の比較

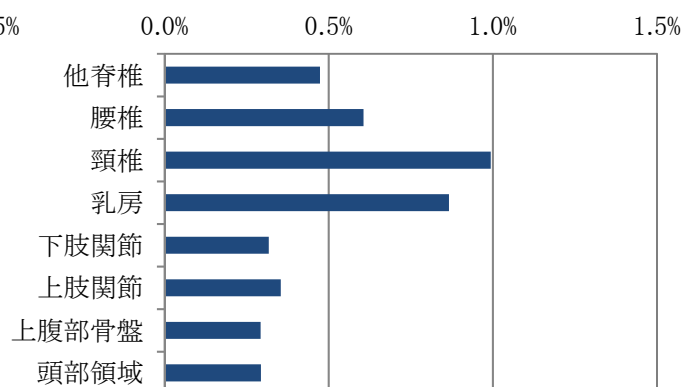


Fig.2 部位別割合の比較

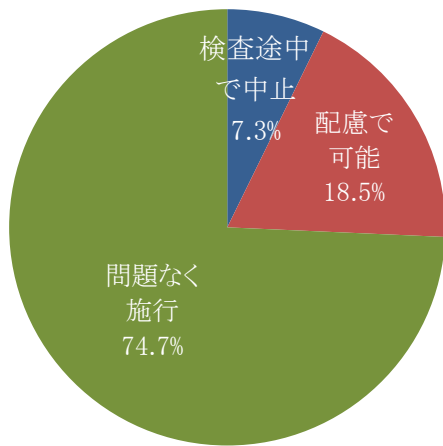


Fig.3 検査遂行率

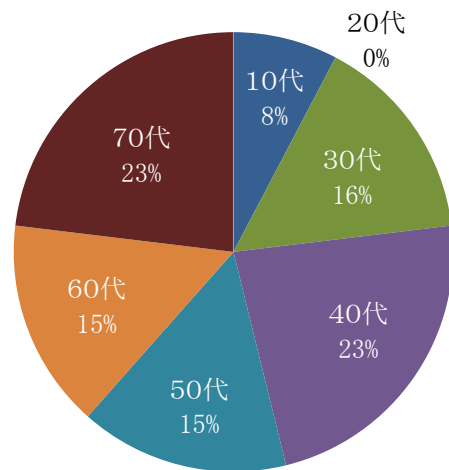


Fig.4 検査中止となった年代別割合

【考察】

検査中止となった方が178人中の13人程度に留まった背景には、検査前の配慮や撮影時間の考慮など、現場での対応により検査可能であったと考えられ、一度検査が始まればほとんどの場合は検査できることが示唆できた。検査中止となった部位別の割合で頭部がなかった理由として、最初から検査ができず中止になった方のデータは含まれないためと考えられた。今後は最初から検査中止となったデータを含めた検討をしていきたい。

【結語】

閉所恐怖症や閉所が苦手の方の統計データを知ることで、日常業務の対応が大きく変わることはないが、その実態を知ることで、今後、閉所恐怖に対する新たな対応の一助になることを期待する。

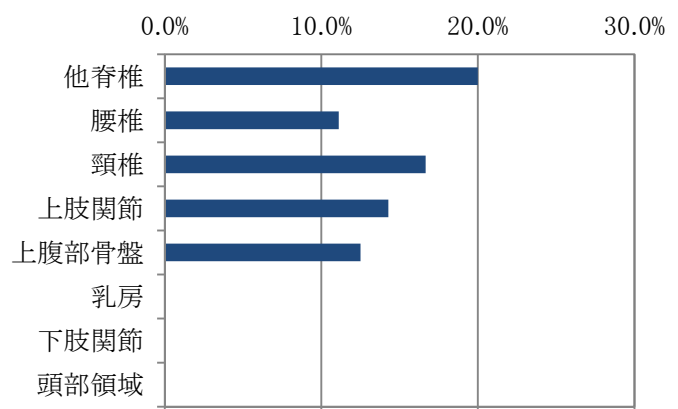


Fig.5 検査中止となった部位別割合